

高校生とともに学び、
つくりだす地域

高校生と大人は

地域活動に参加する「動機」は違う!?

■今号のねらい

前号(166号)では、「地域社会に関わる高校生が増えるであろうことを、政策の変化や実践面から紹介し、地域社会の側で高校生を受け止め、ともに育ち合う姿勢の重要性を示した。今号は、「地域活動に参加する動機」に着目する。地域実践者や政策担当者が高校生と接触し、支える際の参考になればと思う。

■高校生が地域活動に参加する意義

高校生が学校以外の場で自発的に活動する。このことは少なからず自らの持つ



地域の大人たちが、高校生を支えたり、ともに取り組み機会を多彩に用意する栃木県真岡市「まちつく」

知識や経験を総動員し知の総合化を図る力を育むことにつながる。そして他者や



高校生が自らの“やってみたい”を地域の多様な人たちの前でプレゼンし、聴き合う場を用意する栃木県真岡市(「100人の一歩」会議:高校生に限定せず市民活動、事業者なども登壇可能)

地域と関わることを通して、自らの価値や社会の矛盾、課題に気づく機会となり、



石井 大一郎

(国立大学法人宇都宮大学)
地域デザイン科学部 教授

その気づきはその人らしさを見出し、いく助けとなる。不確実性が増す社会のなかではこうした自らの知の総合化やその人らしさを生かす力が育まれていくことは重要であり、そうした高校生がいるのであれば、地域社会において積極的に支える必要があるだろう。このことは、支える大人が現在いまを生きる高校生から未来の地域づくりを学ぶことにもつながる。

■**関心はあるのに参加できていない**

高校生が地域活動に参加する段階を、すでに参加経験がある「既活動群」、参加経験がない「未活動群」。また参加経験がない人のなかでも地域活動に関心のある「有関心群」、関心を持たない「無関心群」に分けて検討してみよう。筆者らが2019、2020年に栃木県の全ての県立高校を対象に行った調査(注1、注2)ではそれらの割合は図1のようであった。全国で

既活動群 27.8%	未活動群 72.2%	
	有関心群 68.6%	無関心群 31.4%

図1：高校生の地域活動等への参加の割合

学校教育における探究学習が広まったのが調査時点より後であることを考えれば、探究学習の影響を受けて学校以外で地域活動やボランティア活動をする高校生は、現在は図1で示した割合よりも増えていることが推察できる。そして未活動群の中でも、アンケートでは、障壁がなければ参加してみたいと思うかを聞いた設問では、思う・少し思うの割合が68・6%（有関心群）となっている。なお、現在参加しない理由について8つの選択肢の複数回答の結果を主成分分析した結果からは、「一緒に取り組む仲間がいない」「自らが取り組む必要性を感じない」「活動を知らない」といった3つの成分が抽出された。関心はあるが参加できていない高校生をコーディネートする際の重要な観点となる。

■**世代によって参加する動機が異なる**

話は変わって、大人の地域活動・ボランティア活動への参加動機を確認しよう。日頃からボランティアコーディネーションをしている人の参加になる。ClaryやSnyderなどが提唱するVFI (Volunteer Functions Inventory) モデルがあり、現代の日本に当てはめてわかりやすく整理

した桜井(2002) (注4)から、その7つの動機(図2)をみてみよう。

この調査では若者ほど、d、eといった利己的な動機が強く、高齢者ほどb、c、fが強いことが示された。ボランティアをコーディネートする側から企画を検討する際に、テーマや地域課題を大きく打ち出して参加してもらおうという広報や声かけが少なくないと考えられるが、若者に対してはそれだけでは行動に結びつきにくいと考えられる。活動に参加するとどのような学びや技術が得られるのか、楽しい体験が得られるか、といった打ち出しが重要となる。

■**高校生の参加動機「グループ動機」**

筆者らの栃木県の高校生へのアンケート調査から導き出された、大人の動機とは異なる動機がある。未活動者の参加の動機として、「友人など誰かと一緒に参加したい」というものである。筆者らはこ

- | | | | |
|-------------|---------|---------------|-----------------|
| a. 自分探し | b. 利他心 | c. 理念の実現 | d. 自己成長と技術習得・発揮 |
| e. レクリエーション | f. 社会適応 | g. テーマや対象への共感 | |

図2：参加の動機 *桜井(2002)から筆者作成



高校生が仲間を作って参加したり、参加した高校生同士が仲間になる場づくりを行う栃木県真岡市「まちつく」



高校生が仲間を作ってアイデア出しや振り返りをする栃木県日光市「モンモンREKITSUKU会議」

れらを「グループ動機」と名付けた。具体的なテーマや課題ではなく、また誰かのためにということではないのだ。友人らと一緒にであることが大事なのである。言い換えれば、「友人らと一緒に」テーマや課題に取り組んだり、「友人らと一緒に」誰かのために取り組むということであれば、初めの一步を踏み出しやすくなるということだろう。

■活動参加を促す際の配慮

ここで、上述してきた視点に加え石井・黒田・小柳(2023)(注3)から得られた知見をもとに、高校生の活動参加をコーディネートする際に配慮すべき特徴的な5つの視点を示す。

(1)地域活動等への参加の割合は、①学校内での生徒会やクラブ活動等への経験がない人や、②地元の市町以外の高校へ通う人は、低くなる。①については、特にグループ動機で示したような仲間とともに活動しやすいサポートが重要であろう。②については長期休暇の機会を活かすなどが考えられる。

(2)大人と高校生には、地域活動等への参加動機には大きな違いがある。つい、コー

ディネット等に関わる支援者は、地域課題や取り組むテーマの意義を重視しがちである。しかし若い人ほど、自己成長や技術習得、レクリエーションの機能が求められることから、地域課題やテーマへの関心を持ってもらいたいのであれば、双方を上手につなぐプログラムづくりが求められよう。

(3)現在なんらかの理由があり参加していない高校生も参加意欲を示す割合は高い。特にこうした経験のない高校生には、グループ動機を促すコーディネートが有効である。

(4)未活動者への「参加したい活動内容」の調査では、①車や自転車の交通マナー、②勉強する場所、③学校と住民との交流、④観光名所や名産品がない、⑤商店街の活気がないが挙げられた(複数選択可能な選択肢は伝統芸能、子どもや外国人等の活動など全16)。学校や公民館等でプログラム開発を行う際は、これらの活動内容に焦点を当てることで、他の活動に比べて高校生同士が連携して活動をしやすい、つまり仲間と一緒に活動するグループ動機を促しやすいと考えられる。

(5)参加を促す方法を検討する際は、多く

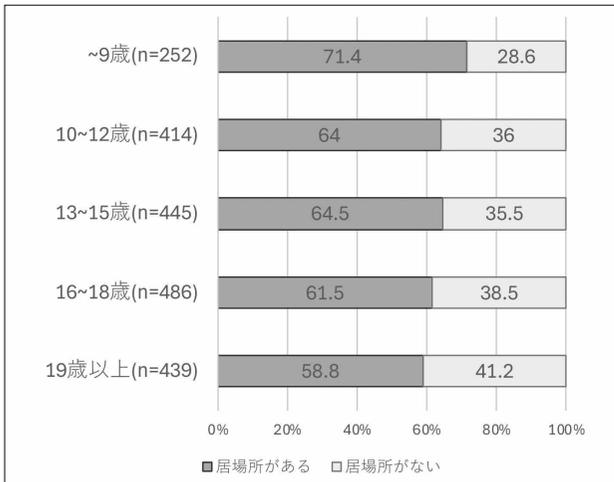


図3：筆者再作図(こどもの居場所づくりに関する調査研究、令和5年3月、内閣官房 子ども家庭庁設立準備室(2.6.調査結果、3))

の人が賛同を示す活動をコーディネートすることが一般だろう。しかし、注意が必要点があることも明らかとなっている。未活動者のなかには、特に①人との関わりを重視した活動内容、②遊ぶ場や祭りといった楽しみを中心とする活動について、強く否定的な意向を持つ人が一定数いることであった。こうした人たちがいることを前提に、異なる意見を認めあうコミュニケーションの支援や、活動への関わり方に強弱のバリエーションを持たせるなどプログラムに工



地域の居場所「コレカラ」を高校生や大人が一緒になってセルフビルドする 栃木県真岡市

夫が必要であるのだ。

■動機を超えて「過ごす居場所づくり」

今号では、高校生が地域で学び、地域を楽しむことのできる社会を目指すために、「動機」に着目してコーディネートする際の要点を整理してきた。最後に、忘れてならないのが、「活動参加の機会」とは別の「過ごす居場所」の重要性である。国の調査(図3)で示されているように学校と自宅以外に居場所がないと答える割合は、

小・中学生より高校生の方が多い。活動に参加できない人・参加したくない人であっても地域と接点を持ち、地域の中で過ごすことができる社会は重要だろう。次号では高校生の居場所について議論したい。

(注1) 宇都宮大学石井研究室は、2019年より栃木県総合教育センターのほか、真岡市、日光市、那須塩原市と高校生の地域社会参加に関する共同研究に取り組んでいる。

(注2) 本調査は、栃木県総合教育センターとの共同研究契約に基づき実施した。県内全ての県立高校において主に各校第2学年1クラスの協力を得て、2692名(回収率96.3%)からの回答が得られた。

(注3) 石井ほか(2023)：石井大朗、黒田聡美、小柳真一、ボランティア経験のない高校生のグループ活動を促す支援と配慮に関する研究、日本福祉教育・ボランティア学習学会誌vol.40,2023年7月
 (注4) 桜井政成(2002)：複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析—京都市域のボランティアを対象とした調査より—、The Nonprofit Review, vol.2, No.2, p.111-122.